

# 旧石器捏造のスクープ

06年5月23日  
上智大講座「ジャーナリズムの現在」  
毎日新聞北海道報道部、渡辺雅春

## 1、はじめに

- ・スクープと調査報道

## 2、取材開始から終了までの内幕（00年8月～04年1月）

- ①取材開始
- ②「石器の神様」のめざましい業績
- ③北海道・総進不動坂遺跡での失敗
- ④宮城県・上高森遺跡での撮影成功
- ⑤本人への取材と紙面化
- ⑥日本考古学協会による調査
- ⑦アマチュア考古学者のその後と釈明
- ⑧今、考古学はどうなっているか

## 3、調査報道の手法とジャーナリズム

### ①いつ報道すべきだったか

- ・撮影成功から、報道までの2週間

### ②ビデオ撮影は盗み撮りか

- ・プライバシーと公益性

00年11月5日付け朝刊に掲載された「おことわり」

※毎日新聞は今回の取材にあたり、常時解放されている遺跡の発掘現場の限定し、あらかじめビデオカメラと写真機材を置いて取材を行いました。考古学研究に極めて重大な影響を及ぼす行為の真偽を確認するためには、発掘現場において本人の動静を確実に捉えることが不可欠と判断したためです

### ④実名か匿名か

- ・考古学者は公人か私人か

### ⑤ビデオ映像はどう扱うべきか

外部に提供しなかった毎日新聞

### ⑥取材の経過と判断の紙面化

## 【基礎用語】

<旧石器時代> さまざまな定義があるが、一般的には、約1万年以上前の時代をさす。「後期旧石器時代」（1～3万年前）、「中期旧石器時代」（3～13万年前）「前期旧石器時代」（13万年以上前）の三つに分類される。この時代区分は、新人、旧人、原人という人類の区別にほぼ対応する。

<原 人 > 600万年前ごろ、地球に登場した猿人になり、約180万年前にアフリカで誕生したと考えられている。ジャワ原人や北京原人が有名だが、その生態やどんな人間だったのかなどは、分からない点が多い。捏造を続けていたアマチュア考古学者の発見によって、東北の原人は、火を使って集団で生活し、時間や死という抽象的な観念を理解し、建物も建てていたとされた。

<総進不動坂遺跡> そうしんふどうざか 北海道新十津川町＝アマチュア考古学者が最初に捏造を認めた遺跡の一つ。99年に30～20万年前の石器3点を発見したとされた。この時には、北海道で初めて見つかった前期旧石器時代の遺跡と発表され、原人がロシア・サハリン経由で日本列島に渡ってきたという学説「北回りルート説」の根拠の一つとされた。結局、遺跡自体が捏造だったと結論付けられた。

<上高森遺跡> かみたかもり 宮城県築館町＝つきだて総進不動坂遺跡と並んで最初に捏造を認めた遺跡。94年に50万年前、95年に60万年前の石器と、石器がきれいに並んだ「石器埋納遺構」まいが発見された。さらに98年、60万年以上前、99年には70万年以上前の石器が見つかり、日本最古の遺跡とされていた。遺跡自体が捏造だった。

<座散乱木遺跡> ざさんらんぎ 宮城県岩出山町＝1981年にアマチュア考古学者が4万数千年前の地層から、石器を発見。3万年以上前の日本列島に人類が住んでいたことを証明したとされた。1960年代から続く、前期旧石器時代存置論争に終止符を打ち、岩宿遺跡と並ぶ、日本考古学のメルクマールとなった。国の史跡に指定されたが、捏造が判明し、史跡指定は解除された。

答案を読ませていただきました。誤字が多いことがやや気になりましたが、皆さんの関心が最も高かったのは、「公益性とプライバシーの問題」（盗み撮り批判と実名報道）でした。また、アマチュア考古学者の動機などについて、講義の後半に駆け足で進んでしまった部分なので説明不足を感じています。以下は、渡辺個人の見解による説明なので、皆さんが後日、毎日新聞社が出版した本などを読んだ時に、やや異なる点があると感じるかもしれませんがあしからず。

また、アマチュア考古学者への直接取材の場面やビデオ撮影に成功する場面など、「ドキドキしました」などと書いてくれた方がいました。あまり話がうまいほうではないうえ、あれらの場面は本当にポイントだけに絞っているのです、うれしく思いました。

#### <公益性とプライバシー>

これには二つの論点があります。「ビデオ撮影に対する盗み撮り批判」と「実名報道」です。

ビデオ撮影について、取材班はまず、遺跡は公の場所であると考えました。アマチュア考古学者の自宅内や私室内を撮影した場合は盗み撮りになるが、遺跡を撮影すること自体、また、遺跡で行われている犯罪的な行為を撮影することは、プライバシーの侵害にはならないという判断です。

答案の中には「捏造がなかった場合は、どう責任を取るのか」という意見もありましたが、そもそも発掘中の遺跡は未明、早朝には特別な用事がなければ、誰も訪れない場所です。もちろん、取材班は付近を散歩している人や通り過ぎる車などにはビデオカメラを向けてもいません。

しかし仮に、遺跡での捏造行為を撮影することがプライバシーを侵害するとしても、捏造を暴くという公益性が優先されると判断しました。これはプライバシーの権利と表現の自由の対立です。アマチュア考古学者のプライバシーを侵害していたとしても、報道することが許されるか否かという問題と言い換えてもいいかもしれません。このようなケースでは、報道される内容が、公共の利害に関する事柄か（公益性、公共性があるか）というのが一つの判断基準になると思います。

日本列島の人類史を捏造してきたという事実を暴くというのは、明らかに公共の利害に関する事柄であって、極めて高い公益性を持っています。このような場合、プライバシーの侵害を理由に表現の自由を制約することは許されないと考えます。

実名報道については、取材班の判断を支持して下さった方も多かったです。「実名には違和感を覚えた」「(アマチュア考古学者は) 私人なのではないか」などの意見がありました。

考古学者は研究所職員や大学教員でもなく、本職は会社員でした。とはいえ、考古学における実績は、並みの考古学者を凌駕していました。論文なども発表しているほか、講演活動もしていました。NPO法人の副理事長であり、「相澤忠洋賞」をはじめとする数々の考古学関係の受賞歴もありました。彼は既に旧石器考古学における一つの「権威」となっていました。このため、公人と判断したのです。確かに遺跡や発掘の捏造は、法律には違反していません。しかし、高校の日本史の教科書にまで載っていたことから考えると、彼は約 30 年にわたり、日本国民全員を欺いていたといっても過言ではない。この罪は法律に抵触しないからといって、軽くみることはできない。それどころか、はるかに重いと思います。

#### <考古学者の動機とその後>

00 年 11 月以降、姿を消してしまった考古学者を取材班は、なぜ再び追ったのか。00 年 11 月、考古学が捏造を認めた遺跡は二カ所だけでした。「捏造は二つだけで、ほかは大丈夫」「成果が上がって

いなくて焦った。魔がさした」という説明でした。

ところが、捏造遺跡は最終的に162カ所に達し、単に遺跡で石器を埋めただけでなく、遺跡そのものが捏造だったケースが多数見つかりました。捏造は過去20年間以上に及ぶことも明らかになり、とても「魔がさした」などという説明では理解できない状態になったのです。日本の旧石器考古学は数十年間にわたって積み上げた研究成果がすべて無となり、日本考古学協会は、捏造遺跡の調査だけで2年間を費やした。ところが本人はその後、公に姿を現すことはなく、いつから、どの遺跡で捏造を始め、なぜ捏造をしたのかなどの説明はありませんでした。

捏造がなぜ、起きて、なぜ長期間にわたって続いたのか。問題の全貌が分からないと、捏造を許した背景や、問題の構造などの十分な分析ができず、将来に向けた教訓も十分な対策も立てることはできません。したがってアマチュア考古学者への取材は必要だったし、取材班としては、少なくとも本人が自分のしたことをきちんと、説明するぐらいのことはすべきなのではないか、そんな気持ちもありました。

さて、約3年ぶりに取材に応じたアマチュア考古学者は、捏造を始めた時期を1974年ごろだと言い、動機は周囲の期待や注文によるプレッシャーだったと説明。「自分は人格が入れ替わる精神疾患で、(捏造の方法や遺跡など)詳しいことは覚えていない」と語りました。

言葉通りだとすると、いわゆる多重人格と解釈できました。しかし、多重人格の症例は日本では極めて少ないといわれていました。また考古学者は病院への入院について「任意だった」と言いました。医師の判断ではなく、自分の判断で入院していたという説明でした。このため、取材班には病状がどこまで深刻だったのか、判断できませんでした。

病名などの情報は、いわゆる個人情報だったので、取材班は考古学者本人の同意を得て主治医に取材を申し込みましたが、主治医は取材を拒否しました。その後も毎日新聞の編集局長名で、取材の意図や社会的意義などを説明した手紙に資料などを同封して送りました。だが、3度とも受け取りを拒否されました。

このため、京都女子大の野田正彰教授(精神病理学)に取材の経緯、インタビューの内容を説明して、お考えを伺いました。以下は野田教授が語った内容の抜粋です。

「マスコミなどで聞きかじった、俗に人格が入れ替わる病気があるという知識を基に、彼は事故に都合のいい物語を作ったのだろう。ただ、自分の作り話を信じきっている可能性が高い。そういう能力を精神医学の概念で『空想的虚言症』という。捏造がばれ、死のふちまで追い詰められるほどの衝撃から立ち直るために病気になりきり、治ることで、もう一度生き直そうという話を作っていると思われる」

主治医の取材がかなわなかったため、考古学者の病状などは、よく分かりませんでした。だが、私には野田教授の説明が実にしっかりと受け止められました。

とはいえ、今でも捏造を始めた動機や継続していった理由、具体的な捏造方法などは本人からの説明がなく、詳しく分かっていないのが実情です。